縄文時代の「大形住居」について（その1）

——その定義と機能をめぐる若干の考察——

小　川　　望

第一節　「大形住居」の定義について

わが国の縄文時代の住居址の中に「大形住居」と呼ばれる一連の遺構がある。これは，一般に知られている住居址に比べ極めて「大きい」ことをその最大の特徴としているが，このこと自体がこの遺構の実体に迫ることを困難にしている。まずこの遺構の理解に関する問題点を概観しよう。

第一に，「大形住居」を住居址全体の中から分離する規準はどこに求められるであろうか，それが住居址の長さであれ面積であれ，連続的に変化する数量の上に何らかの値を定めることができるものでないことは当然である。だとすれば，ある住居址が「大形住居」であるかどうかの弁別はどのようになされるべきであろうか。この弁別の問題について明確に論じた論考は管見の及ぶ限りでは見当らない。「集落の中で断然他を圧する特大形竪穴住居」（赤山　1982　p. 118），「集落内での相対的な差としての大規模な住居跡」（高橋与　1983　p. 379）という表現に代表されるような，集落内での規模の比較によるものを除けば，いわば「本質的了解事項」として，その弁別の手続きが明らかにされていないのである。しかも，集落内での比較の場合も，必ずしも客観的な規準とはなりえない。「馬場平Ⅱ遺跡」の発掘調査報告書のまとめにおけるような，長短軸，床面積のグラフ化による大形住居址の分離（高田　1983　p. 50）（図１）も，一見客観的に見えるが，発掘調査の対象となった地域が集落そのものと一対一に対応するものではないことはともかくとしても，この集落に大形住居が存在しなかった場合に，「中形住居」を大形住居でないものとして区別する規準はやはり主観的な判断に依らざるを得ない。更にこの方法では，長短軸なり床面積なりのグラフ化により，大形住居と通常の住居とが二つの群に分れる場合にのみ有効である。即ち，最小の大形住居が最大の通常の住居より大きい場合にのみ，両者を分離しうるということである。

しかも，こうした方法によって仮に通常の住居とは異なる特異な存在として大形住居が抽出しえたとしても，それは必ずしも単一の性格のものとは限らない。この点については，中村良幸による指摘がある。中村は，「（略）早期から晩期までのそれぞれ異なった性格を持つと思われるグループをも一括してしまっており，このままではこれらの遺構の本来の姿を著しく歪めてしまう恐れがあるのである。」（中村　1982　p. 134）とした上で，大形住居を①掘立柱状遺構と②竪穴式とに大別し，後者を更に１）長方形大形住居址と２）円形大形住居址とに区分している。

また逆に，同一の性格のものも，時間的，空間的に様々な変異を示すことも考えられる。即ち，単一の文化事象としての大形住居というものを考えた場合，それが時間的にも空間的にも，何らかの規準，特徴というもので常に律せられる性質のものであるとは限らないということである。

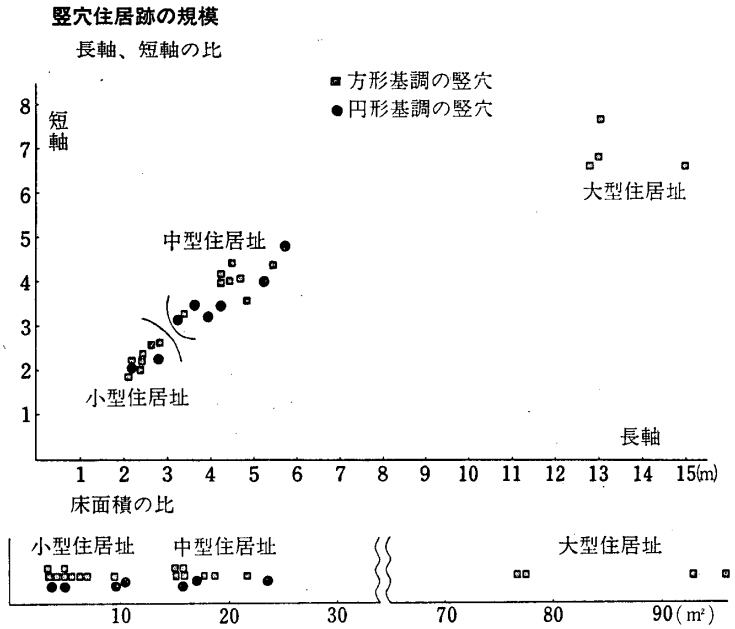

図1　馬場平Ⅱ遺跡（高田　1983）

しかし，これらの問題点に対して，高橋文夫，中村良幸のように，「規模にのみ終始すると（略）遺構の本質を見失う恐れがある。（略）規模が若干小さくとも，その内容・性質などから“大形住居址の疑いの強いもの”を含めて俗に「大形住居系列」と呼んでいる。」（中村　1982　p.134）といった形で，規模以外の要素をもって大形住居を弁別しようとする見方はどうであろうか。分析の結果として大形住居に特有の性質が抽出され，それをもって二つの事例を大形住居に含めるか否かの弁別を行うことは妥当であろうが，予め主観的な先験的な規準を設け，これによって大形住居を弁別するのであれば，その結果得られるであろう大形住居の特質は限定されてしまい，同義反復に陥ってしまうことになろう。

更に，これら定義の本質に係わる様々な問題の他に，名称の不統一という問題もある。即ち，「大形住居（址）」（中村　1982　p.134—146，赤山　1982　p.118—120，工藤　1982　p.55—57，小島　1982　p.57—58），「大型住居址」（高橋文　1982　p.47—54，高田　1983　p.48—51）「長方形大形家屋址」（渡辺　1980　p.37—43，ほか）などのように，いくつかの名称が与えられている。無論これは，報告書，研究者のこの遺構に対してもつ認識とも深く係わっており，どれが適当であると一律に決められる問題ではないが，本稿では「大形住居」をもってこの遺構を示すことにする。なぜなら，これまで述べてきたように，「大きさ」をその最大の特徴とする遺構である以上，長方形などといった平面形でこれを規定するのは妥当でないことが第一にあげられる。また，「大形」と「大型」の両方の文字が用いられているという表記上の問題もあるが，これについては「上里遺跡」の発掘調査報告書のまとめにおける，高橋与右ヱ門による言及がある。ここで高橋は，「「大形」といった場合には小形の住居跡が具備している条件をそのまま備えていればいいのであって，ただ単に他の住居跡に比較（その集落内での相対的規模とその差）して，大規模であることを

示すものであろう。もう一方の「大型」とした場合には規模が大規模である以外に，炉跡や遺物の種類やその出土状況，そして住居跡内の施設等の内的条件が小規模の住居跡と違うという含みがあるのではないだろうか。」（高橋与　1983　p.376—379）と論じているが，続けて「ここで「大型住居跡」としているのは，内的条件より集落内での相対的な差としての大規模な住居跡を差している。」として，その用法には若干の混乱が見られるようである。

これに対し本稿では，「大形」と「大型」とを次のように理解し，使い分けることにした上で，「大形住居」を用いることにしたのである。即ち，「大形」とは何らかの遺構，遺物を考えるとき，その中で規模の大きいものを示す。これに対し「大型」は，「大きい」という属性がその遺構，遺物を他の類似の遺構，遺物から区別しているということを表わす。つまり，「大形」は一連の遺構，遺物における内的な差を示すのに対し，「大型」はそれ自体が一つの独立した文化事象を区別する属性を示すものと考えられる。そして，この「大型」の遺構，遺物の「大きい」という属性は，その機能によって選択された結果によるものであり，その機能が更に他の特徴を規定していくものであろう。これは考古資料としての解釈の問題ではなくて，作り手の側からの選択の問題である。そういう意味では，先に引用した高橋与による「炉跡や遺物の種類やその出土状況，そして住居跡内の施設等の内的条件が小規模の住居跡と違うという含みがあるのではないだろうか。」（高橋与　1983　p.379）という表現は結論を先取りしすぎたものと言わねばなるまい。

以上のように考えるなら，一つの文化事象として抽出された遺構は本来「大型」をもって呼ばれるべきであろうが，すでにのべたように，単一の文化事象として認定されていない現在，“単に大規模なることをもって住居址全体の中から区別された単一もしくは複数の文化事象”として「大形」を用いる方が，現時点では妥当であろう。

ここでつけ加えておくべきことは，「大形住居」という名称が，その機能を住居に限定したものではないということである。一般の「住居（址）」そのものの機能の問題はここでは措くとして，未だにその機能の明らかでない遺構に対する名称としては，予め機能を規定するような用語は避けるべきであろうが，本稿では，新たな名称を設定して更に混乱を深めることを避けるために，こうした問題点を指摘した上で，「大形住居」の語を用いていくことにしたものである。

第二節　大形住居例と研究史

大形住居の具体的な検討にはいる前に，現在までに，どのような事例が大形住居としてとり扱われてきたのかを示した上で（表１），大形住居の研究史を概観しよう。

大形住居に関する研究史は短い。現在大形住居とされる住居址そのものの最初の発見（1967年青森県大森勝山遺跡(2)）からまだ18年を経たにすぎないのである。しかもこのときは，円形という後晩期に一般的な形態をもっていたこともあって，まだこの住居址に対しては特別な意味を見出してはいない。初めて特殊な遺構としてその大きさが論じられたのは，1973年の富山県不動堂遺跡(31)２号住居址についてであり，それまでは大形住居研究前史ということができる。

表1 "大形住居"一覧

遺跡No.	遺跡名	住居址名	時期	大きさ(m)	平面形	炉の形態				"大型住居"
						地床炉	石囲炉	複式炉	土器埋設炉	
1	大平	J—4	前～中前	9.6×7.4	長円	—	—	—	—	
		J—13	〃	10.2×7.3	隅丸長方形	0	0	0	0	○
		J—23	〃	12.4×9.3	〃	0	0	0	0	○
		J—25	〃	12.2×9.1	楕円	0	0	0	0	○
		J—26	〃	12.1×8.8	長円	0	0	0	0	○
2	大森勝山	——	後～晩	13.8×12.8	円	0	1	0	0	○
3	近野	8号	中中	19.5×7.0	長円	4	0	0	1	○
4	萱刈沢	5号	中前	9.8×4.2	隅丸長方形	—	—	—	—	
5	杉沢台	SI 06	前後	16×6.6	長円	(10)	0	0	0	○
		SI 07	〃	31×8.8	〃	6	0	0	0	○
		SI 18	〃	15×7	〃	6	0	0	0	○
		SI 26	〃	8.3×5.5	〃	—	—	—	—	
		SI 44	〃	28×9	〃	(10)	0	0	0	○
		SI 45	〃	9.5×7.3	楕円	—	—	—	—	
6	柳沢	6号	前中	15×5	長方形	4	0	0	0	○
7	荒谷A	IF—50	中中	17.0×8.0	卵形	3	1	0	0	○
8	荒屋Ⅱ	EI—1	中前	6.9×4.0	隅丸長方形	—	—	—	—	
9	大館町	RA 102	中中	8.5×6.6	楕円	—	—	—	—	
10	樺山	2号	中中	6.0×4.5	隅丸長方形	—	—	—	—	
11	叺屋敷I	EⅢ—3	中後	9.8×7.0	楕円	—	—	—	—	
12	上里	D—23	中前	9.3×8.1	隅丸長方形	0	0	0	0	○
		G—16	〃	11×6.6	長円	(2)	0	0	0	○
		I—19	前後	(12)×7.5	楕円	—	(不	明)	—	○
		I—22	中前	13.8×5.2	長円	—	(不	明)	—	○
13	観音堂	1号	中後	9.0×8.6	円	0	0	1	0	○
14	塩ケ森	AD 30	中前	13.0×9.3	長円	0	1 (土器埋設)	0	0	○
		AI 53—1	前後	13.6×4.3	長方形	—	(不	明)	—	○
		BB 56	——	10.8×4.9	〃	0	0	0	0	○
		BI 09	中前	14.3×6.0	〃	3	0	0	0	○
		4I	〃	14.8×5.2	長円	(1)	(2)	0	0	○
		4J	——	7×5.5	〃	—	—	—	—	
		5G	中前	(15)×5.3	長円	0	(2)	0	0	○
		5H	中中	6.5×5.7	楕円	—	—	—	—	
15	大地渡	Ee 68	中中	6.5×3	長方形	—	—	—	—	
16	長者屋敷	EV—1	中後	9.8×8.4	方形	0	0	1	0	○
		FⅣ—4	前前	11.6×8.0	長方形	6	0	0	0	○
		GⅣ—3A	〃	10.8×6.8	隅丸長方形	4	0	0	0	○
		GⅣ—3B	〃	13.4×8.4	〃	5	0	0	0	○
		GⅣ—4	〃	11.0×7.0	長円	5	0	0	0	○
		GV—2	前後	12.8×5.5	隅丸長方形	12	0	0	0	○
		HⅢ—12	〃	23×8.2	長円	(28)	0	0	0	○
		HⅥ—1	中後	12.4×9.2	楕円	2	0	1	0	○

縄文時代の「大形住居」について（その1）

遺跡No.	遺跡名	住居址名	時期	大きさ(m)	平面形	炉の形態				"大型住居"
						地床炉	石囲炉	複式炉	土器埋設炉	
		JⅦ—27	前後	21.0× 7.2	楕円	11	0	0	0	○
		QⅣ—1	晩	8.7× 8.7	円	0	1 (土器埋設)	0	0	○
17	繋 Ⅲ	I—5—2	中中	(17)×10	楕円	1	0	0	1	○
		I—8	中後	8.0× 7.4	円	—	—	—	—	
		J—7	〃	9.8× 9.5	〃	1	0	1	0	○
18	繋 V	3号	中中	(11)× 5	楕円	0	2	0	0	○
		5号	〃	6.1× 5	隅丸長方形	—	—	—	—	
19	長瀬 B	Bi 03	早中	9.6× 7.3	〃	—	—	—	—	
20	中曽根 Ⅱ	149号	前前	9.8× 3.6	長方形	—	—	—	—	
		155号	〃	12.8× 6.6	隅丸長方形	0	0	0	0	○
		193号	〃	11.6× 8.5	〃	0	0	0	0	○
21	野駄	CI—1	前後	8.0× 4.5	隅丸長方形	—	—	—	—	
22	鳩岡崎	CI—21	前後	(14×6.2)	長方形	—	(不	明)	—	○
		CJ—24	〃	23 × 5	〃	3	0	0	0	○
		DE—18	中前	23 × 8.5	〃	(13)	0	0	0	○
23	鳩岡崎上の台		中中	12.6× 6.8	楕円	0	1	0	0	○
24	馬場平 Ⅱ	C 3	〃	13.0× 6.9	長方形	5	0	0	0	○
		C 4	〃	15.0× 6.7	〃	2	3	0	0	○
		C 7	〃	12.8× 6.6	〃	1	0	0	0	○
		C 9	〃	13.0× 7.7	〃	3	0	0	0	○
25	坊主峠	——	—	7.5× 4.2	楕円	—	—	—	—	
26	曲田 I	FⅢ—06	晩	9.2× 9.2	円	0	1	0	0	○
27	湯沢	CⅢ—7	中後	8.8× 8.5	〃	1	0	0	2	○
28	水上	2号	中後	8.4× 4.9	楕円	—	—	—	—	
		6号	後	8.0× 6.3	〃	—	—	—	—	
29	沖ノ原	長大 1号	中中	10.0× 4.0	長方形	0	1	0	0	○
		〃 2号	〃	( )× 4	〃	—	—	—	—	
		〃 3号	〃	( )× 4.5	〃	—	—	—	—	
30	不動堂	2号	中前	17 × 8	長円	0	4	0	0	○
31	松原	4号	〃	11.2× 7.0	隅丸長方形	1	0	0	0	○
32	水上谷	6号	中中	8.7× 6.6	長円	—	—	—	—	
33	吉峰	31号	前後	8 × 5.6	〃	—	—	—	—	
34	莇生	4号	中中	8 ×(6)	楕円	—	—	—	—	

そこで，不動堂遺跡における大形住居の発見を大形住居研究の一画期と考え，それ以降を三期に区分して，その各々の時期について，研究の動向を概観しよう。

○第一期　大形住居の“発見”期（1973～1975）

不動堂遺跡の“大住居跡”の発見が，考古学ジャーナル誌（No. 85）上に報じられてから（小島 1973），その機能についての一つの見解が発表される前までの時期を第一期とする。

考古学ジャーナル誌における不動堂遺跡例の速報において小島は，このような「大きな竪穴跡を，安直に住居址と呼ぶべきかは問題であろう」（小島　1973　p. 13）として，すでにその機能や住居

址としての呼称についての検討の必要を述べている。この報文の後，同じ考古学ジャーナル誌(No. 99) 上に，秋田県柳沢遺跡(6)における“大形の住居址”が報じられた（富樫　1974）のをはじめ，岩手県坊主峠遺跡(25)，富山県松原遺跡(31)，水上谷遺跡(32)，吉峰遺跡(33)における「大形住居址」の発見が相次いだ。しかし，これらの発見においては正式の報告書の刊行がなされていないこともあって，不動堂遺跡例との関係を論じたり，特殊な遺構としての位置づけがなされた例はなく，わずかに柳沢遺跡例の報文（富樫　1974）が，萱刈沢遺跡例と不動堂遺跡例について言及しているのみである。従って不動堂遺跡例の発見は，大形住居研究史上の一つのエポックではあったが，遺構としての研究の具体的な始まりは，次の第二期まで待たねばならない。

○第二期　大形住居の認識期（1975～1980）

渡辺誠による大形住居の機能に関する論考が発表されてから，編年等の更なる分析の行なわれるまでの時期を第二期とする。これは大形住居の一つの遺構としての認識が一般化していった時期でもある。

渡辺は『縄文時代の植物食』と題する論考の中で不動堂遺跡例をとりあげ，これを縄文時代のナラをはじめとする堅果類の発達した利用の傍証として示した（渡辺　1975)。即ち渡辺は大形住居を大形家屋址と呼んで，その機能を居住に限定しない態度を示した上で，これを堅果類の「アク抜き作業に伴う共同作業施設」とした。ここで渡辺は，自らの参加した新潟県沖ノ原遺跡(29)例から出土したクッキー状（団子状）炭化物や，同遺跡における大形住居の占地状態，大形の炉などを根拠としてあげ，また同様の遺構として他に，水上谷遺跡例，不動堂遺跡例，柳沢遺跡例を引用している。

更に，長大な炉の北陸地方に集中することと，これらの遺跡の分布とを比較し，「集落の調査の進んでいる関東地方や中部地方の太平洋側に類例のみられないことは，積雪量の多寡に起因するのではなかろうか。」との指摘も行っている（渡辺　1975)。

その後渡辺は，沖ノ原遺跡の報告書における考察において，こうした見解に加え，大形住居における屋内貯蔵という機能をも論じている（渡辺　1977)。

これらの大形住居の機能に関する論考は更に，「雪国の縄文家屋」という独立した論文として世に問われている（渡辺　1980)。

大形住居の機能についての諸説が論じられる中で，渡辺によって提出された「積雪地帯の共同作業施設及び貯蔵施設」という考え方は，現在までのところ一つの定説とされている。

しかし，渡辺による研究は多くの重要な指摘を含んでおり，また大形住居を特定の機能をもった遺構として認識させる役割をはたしたものであったとはいえ，それは大形住居に関する議論にピリオドをうつものではなかった。渡辺の研究の意図は，大形住居の機能や形態の追求にあったのではなく，先にのべたように縄文時代の植物利用の解明に重点がおかれており，大形住居自体に関する細かい分析を試みたものではなかったのである。

○第三期　大形住居研究の展開期（1980～　　）

大形住居の機能に対する渡辺説の提示以降の，大形住居に対する様々な分析や整理の行なわれた時期を第三期とする。

第二期の間は比較的大形住居の発見及び報告の数は少なく，青森県大平遺跡(1)，近野遺跡(3)，等数例にすぎない。ところが，1980年代に入ると堰を切ったように報告が相次いでいる。これは1970年代後半に始まった東北縦貫自動車道や東北新幹線及びそれに関連する大規模な土木工事の結果によるものであったが，それだけでなく，大形住居が遺構として認識されてきたことも大きく関わっていたと考えられる。この時期の発見例，報告例の特色は，こうした事情もあるが，岩手県に極めて多いこと，そして一遺跡から複数の大形住居の発見された例の多いことがあげられる。

このような発見例，報告例の増加や大形住居の多様なあり方の報告は，大形住居自体の集成及びその分類，分析を導くものであった。しかしこれはまた，第二節でのべたような，大形住居という言葉のもつ曖昧さの表面化した時期でもあった。

1980年に刊行された長者屋敷遺跡(16)の報告書において高橋文夫が「大型住居系列」なる語を「(用語，定義検討中）」としながらも大形住居に対して用いた（高橋文　1980）ことは，大形住居の定義という作業を先送りした形で曖昧なまま用いることを他の研究者に許す形となってしまっており，この時期の，そして現在の研究の状態を象徴するものといえるのではなかろうか。更に，大形住居に関する資料の増加及びこうした実体の曖昧さは逆に，大形住居の機能の解明という問題へのアプローチを置き去りにさせてしまっている観がある。

いずれにせよ，1980年以降の資料の増加は，大形住居に関する論考の増大をもたらしたことも事実である。『杉沢台遺跡』（永瀬　1981），『鳩岡崎遺跡』（相原　1982），『馬場平Ⅱ遺跡』（高田1983），『上里遺跡』（高橋与　1983）などの報告書では，その考察部において大形住居についての整理，分析を試みている。同様の整理，分析は『縄文文化の研究』第8巻の「大形住居」（中村1982）や『季刊考古学』創刊号の「大形住居址」（工藤　1982，小島　1982）においてもなされている。

以上，不動堂遺跡例の発見にはじまり，渡辺誠の「共同作業所説」を経て現在に至る大形住居に関する研究史を概観したが，これは，その多様なあり方をいかに捉え，定義づけるか，そしてそれは独立した文化事象としての大形住居の機能といかに対応するものであるかという，今後の研究に必要とされる問題意識，視点への方向づけを与えるものである。

第三節　長者屋敷遺跡例の検討

これまで見てきたように，現在，大形住居と称せられているものは，単一の文化事象であるとは限らず，また時間的，空間的に多様な変異を示すものである可能性をもっている。従って，大形住居に対する議論は，大形住居の可能性のあるものを蒐集していくのではなく，大形住居と確実に呼べるであろうものを時間的，空間的変異をできるだけ捨象した形で抽出し検討を加えた上で，改めてそれを事例の蒐集へとフィードバックしていくという形で行っていこうと思う。

まず，空間的変異を捨象するために，検討の対象を長者屋敷遺跡という一つの遺跡に限定した。

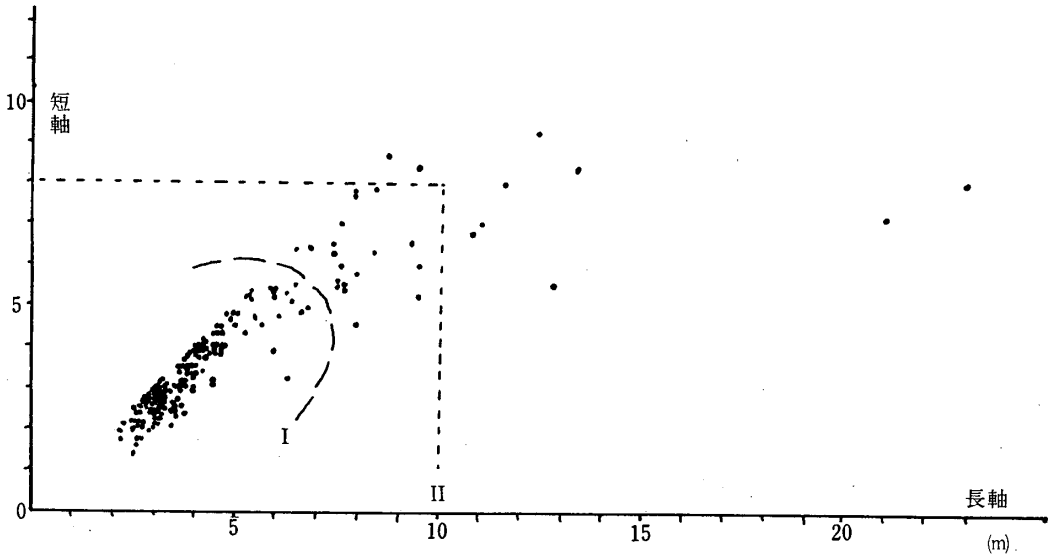

図２　長者屋敷遺跡の住居址の規模

この遺跡は，比較的広い面積を調査対象としているために，集落としての把握がほぼ可能であろうこと，また多くの住居址が検出されており，その時期も長期に亘っていて，時間的変異が捉えやすいであろうこと，そして大形住居址例の報告のあった諸遺跡のほぼ中央に位置していることなどの理由によって選定したものである。

○岩手県松尾村長者屋敷遺跡(16)（高橋文　1980，1981）

長者屋敷遺跡は北上川の支流の長川によって開析された，標高345m～380mの東にはり出す台地上に位置している。遺跡の北東及び南東に小谷が入り込んでおり，斜面には自然湧水点が点在している。南方２kmのところには大形住居例の報告されている野駄遺跡が位置している。

遺跡は縄文時代前期から晩期までと歴史時代（平安時代）の複合遺跡であり，縄文時代の遺構は竪穴住居址257群352棟，大型ピット類347基，陥し穴状遺構２基，配石遺構３基，焼土遺構16基が検出されている。遺跡は堤沢によって南北に二分されているが，南側は別の舌状台地にあり，遺跡の中心は北側にある。北側の遺構は東へはり出す台地面上及び斜面上にあり，密度の高い部分と低い部分とがある。大形住居と報告された住居は，台地面上の西側奥にその殆どがあるが，東側の斜面上にも見られる。フラスコ状土坑が主に東側斜面の北縁から台地縁にかけて集中している。

この遺跡で検出された住居址352棟のうち，確実に大形住居とすることのできるものはどれであろうか。まず最初に，全住居址の長短軸の長さを座標平面上に示してみた。（図２）

この結果を見る限りでは，住居ははっきりとした群の形には分離しえないが，この遺跡における通常の住居が一定の規格をもっていたと考えるならば，それはこのグラフ上の(Ⅰ)の範囲の周辺に求められよう。そこで，多少の誤差を考慮に入れて，(Ⅱ)のラインより外側にある住居を大形住居と考えて検討を加えることにする。これは，長軸方向において10m以上の範囲と短軸方向において

８ｍ以上の範囲の和集合として表わされる範囲ということになる。改めてのべるまでもないが，この数値は，大形住居の最小限度を示したものではなく，また普通の住居の最大限度を示したものでもなく，縄文期においてこの値が何の意味もなかったことは勿論である。また，時期によって住居の長短軸方向の長さの規範（もしそういうものがあったとしても）は変動したであろうし，個体差も考えられる。更に発掘時の確認面の深さや掘り方によって，住居址のとる数値は変わりうるものである。

しかし，最初にも述べたように，大形住居がその規模において一つの群を形成すると予め前提することは妥当でない。むしろ通常の住居が一つの群を形成すると考える方が妥当であろう。そこで，全体の中からその範囲に含まれないものをひとまず大形住居と考えることにした。

繰り返して確認しておくと，この数値はこれから検討を加えていく対象を規定するためのものであって，これより小さいものの中にも大形住居が含まれているかどうかということは，今後の検討の後に検証されるべき事柄である。

さて，以上の手続きによってほぼ確実に大形住居と考えられる遺構が抽出されたと考えるが，次にこれを概観しよう。

①　ＥＶ―１住居址（図３―１）

凸辺台形状のプランを呈する9.5m×8.4mの中期末葉に比定される住居址で，P_1～P_{10}の10基の主柱穴を持つ。複式炉の系統を引くとみられる炉の検出が報告されている。床面またはやや上位から少量の一括土器が検出されている。３基の縄文期土坑と切り合っており，うち２基はフラスコ状土坑である。

②　ＦⅣ―４住居址（図３―２）

樽形に近い辺の長方形のプランを呈する11.6m×8.0mの，前期前葉に比定される住居址で，ＦⅣ―３住居址を切り，ＦⅣ―５住居址によって切られている。主柱穴はP_1～P_{12}の12基と考えられている。南壁沿いに周構が認められている。この住居に伴うと考えられている炉は６基であり，その全てが地床炉である。床面上の遺物は，土器片が少量と石鏃，半円状扁平打製石器，スクレーパーである。

③　ＧⅣ―３Ａ，３Ｂ（図３―３）

報告者の分析によれば，ＧⅣ―３住居址群と呼ばれる遺構は大きく２つの住居址群に分けられる。平面形はともに隅丸長方形と呼びうるものであり，時期ともに前期前半に比定されている。規模はＡ住居址群が10.8m×6.8m，Ｂ住居址群が13.4m×8.4mに及ぶものと考えられる。炉は全て地床炉であり14群29基が検出されている。そのうち４群がＡ住居址に５群がＢ住居址群に伴うものとされている。また，埋設土器，溝状の張出し部が検出されているが，性格は不明である。

④　ＧⅣ―４（図３―４）

楕円形のプランを呈する11.0m×7.0mの，前期前葉に比定される住居で，ＧⅣ―３住居址群内のＡ住居址群を切っている。主柱穴はP_1～P_9の９基と考えられており，ジグザグ状に配置してい

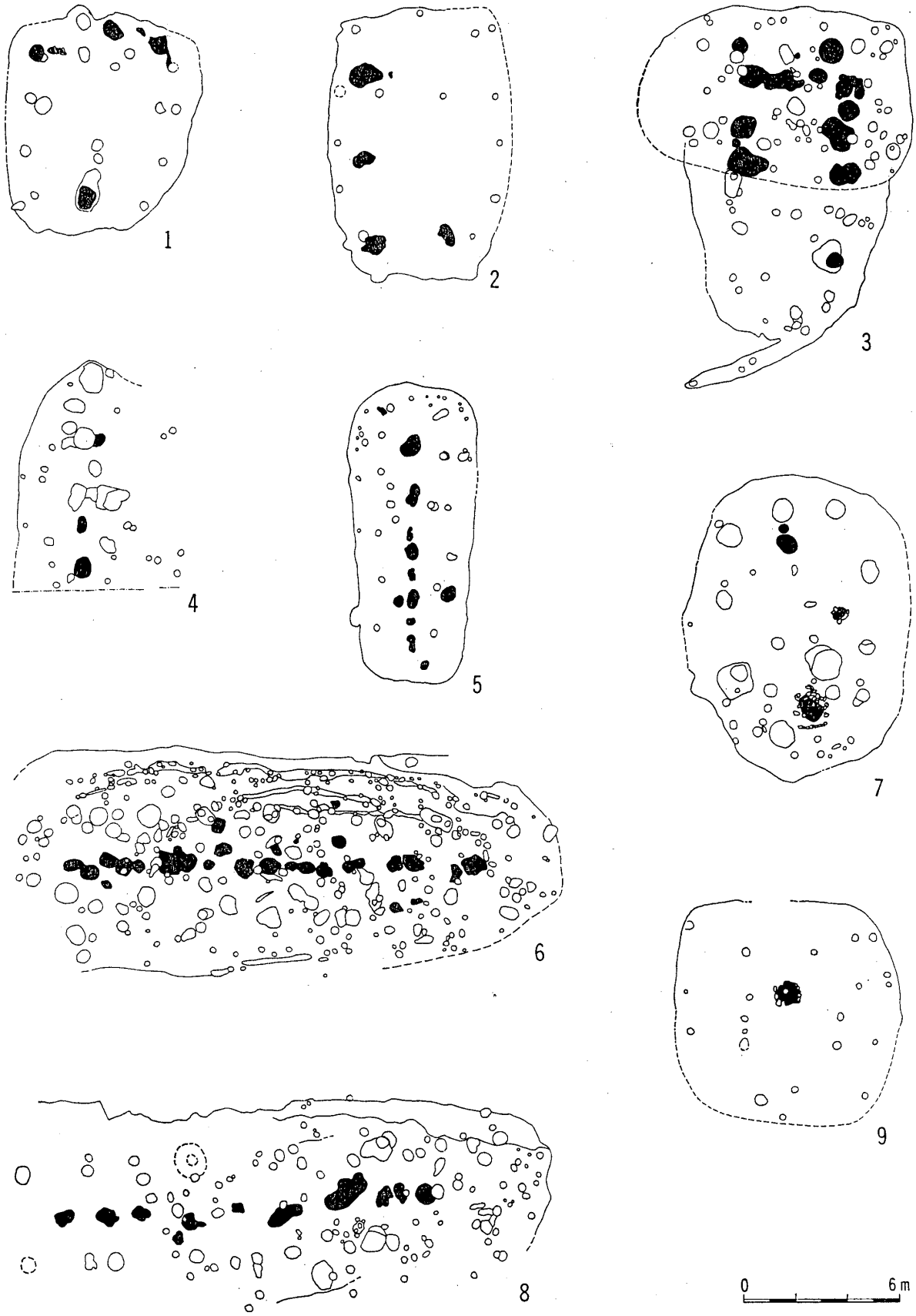

図3　長者屋敷遺跡例（高橋文　1980，1981より）

る。地床炉と考えられる現地性焼土が5ケ所に形成されている。これらは，住居址の長軸線に沿った部位にある。埋土内には多量の遺物が含まれており，複数の廃棄ユニットから構成される複合廃棄物的な人為堆積相を示しているという。しかし，床面上に伴う遺物は検出されていない。

⑤　GⅤ—2住居址（図3—5）

隅丸長方形のプランを呈する12.8m×5.5mの，前期後葉に比定される住居址で，GⅤ—1住居址を切っている。またGⅤ—54フラスコ状土坑と重複しているが，その前後関係は不明である。主柱穴はP_1～P_{12}の12基であると考えられている。炉はいずれも地床炉で，12基検出されているが，長軸線上にほぼ一直線に並ぶ配列を示しているものが多い。床面上からの遺物は検出されていない。

⑥　HⅢ—12住居址群（図3—6）

15回にわたって重複をくりかえしたと思われる住居址であるが，いずれも基本的には長円形のプランを呈すると考えられている。これらの住居址群は23.0m×8.2mの細長い範囲に存在している。炉は全部で28基検出されているが，いずれも地床炉であり，1回の構築に対して数基の炉が伴ったと考えられている。出土遺物は報告されていない。

⑦　HⅦ—1住居址群（図3—7）

楕円形のプランを呈すると考えられている中期末葉の住居址で，12.4m×9.2mの規模をもつ，柱穴配置などから軒の重複と推定されている。また，HⅦ—51，52，54，58のフラスコ状土坑を切っている。主柱穴はP_1～P_{11}，P_{12}～P_{19}の11基及び8基であると考えられている。部分的に周溝が認められている。炉は全部で3基検出されているが，そのうちの1基は複式炉であり，残りの2基は地床炉である。いずれも長軸線上に位置している。床面上からの出土遺物はない。

⑧　JⅦ—27住居址群（図3—8）

隅丸長方形のプランを呈すると考えられる前期末葉の住居址で，21.0m×7.2m前後の規模をもつ。柱穴配置などから，最低4軒の重複が推定されている。炉は全部で11基検出されているが，いずれも地床炉であり，1回の構築に対して3～4基の炉が伴ったと考えられる。床面上にいくつかの土器群が検出されている。

⑨　QⅣ—1住居址群（図3—9）

円形のプランを呈する晩期末葉の住居址で，径8.7mの規模をもつ。柱穴配置などから4軒の重複が推定されている。炉は床面中央部に1基検出されており，土器埋設石囲い炉の形態をとっている。埋設土器の他に床面から土器片が少量検出されている。

次にここで抽出した大形住居を通常の住居と比較し，その特徴を検討していこう。検討の対象は，平面形及び炉の形態の二つに絞って行うことにした。これは，柱穴の数は遺構の規模に応じて変りうるものであるし，それ以外の要素については，報告から充分なものが得られないと考えられたからである。この点については，中村も同様の特徴に注目して，大形住居の分類を行っている。そこでは中村は，形態（平面形）を「A．隅丸方形，隅丸台形（樽形）　B．（隅丸）長方形，長楕円

表2　長者屋敷遺跡の大形住居の形態

炉＼時期区分	早期	前前期葉	前中期葉	前後期葉	中前期葉	中中期葉	中後期葉	後期	晩期	不明他	計
地床炉	—	5	—	2	—	—	1	—	—	—	8
石囲い炉	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
土器埋設石囲い炉	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	1
複式炉	—	—	—	—	—	—	2	—	—	—	2
土器埋設炉	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
伴なわない	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
不明	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
（重複）	—	—	—	—	—	—	−1	—	—	—	−1
合計	—	5	—	2	—	—	2	—	1	—	10

表3　長者屋敷遺跡の大形住居の炉の形態

平面形＼時期区分	早期	前前期葉	前中期葉	前後期葉	中前期葉	中中期葉	中後期葉	後期	晩期	不明他	計
長方形+方形	—	1	—	—	—	—	1	—	—	—	2
隅丸長方形	—	2	—	2	—	—	—	—	—	—	4
長円	—	2	—	—	—	—	—	—	—	—	2
楕円	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	1
円	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	1
不明	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
合計	—	5	—	2	—	—	2	—	1	—	10

形（小判形）　C．円形，卵形」，炉址の状態を「a．主たる炉址がない　b．主たる炉址が1カ所しかない　c．主たる炉址が複数あり，並列に並ぶ　d．主たる炉址が複数あり，直列に並ぶ」に分類しており，その組合せから，「B—a類（早期），A—c類（前期前半），B—b類（中期中葉），B—d類（前期前半～中期末葉），C—b類（中期末葉～晩期）」という対応関係が見られるとしている。（中村　1982）また，高橋は平面形を「Ⓐ—長方形，Ⓑ—Ⓐより長い長方形や長楕円形，Ⓒ—楕円形かほぼ円形　の3型態に大別される」として，その分類の基準に，短径と長径との比率を用いている。即ちⒶは1.3～1.45，Ⓑは1.5以上，Ⓒは1.4以下としている。（高橋与1983）

ここでは，通常の住居との比較に重点をおくため，炉についてはその数や並び方でなくて，その種類に注目し，1）地床炉，2）石囲い炉，3）土器埋設石囲い炉，4）複式炉，5）土器埋設炉，6）炉を伴なわない，の6種に分類する。また，平面形については，これを1）長方形，2）隅丸長方形，3）長円形，4）楕円形，5）円形，の5種のいずれかに分類することにする。方形は長

表４　長者屋敷遺跡の「大形住居」を除いた住居址の炉の形態

炉＼時期区分	早前	前前期葉	前中期葉	前後期葉	中前期葉	中中期葉	中後期葉	後期	晩期	不明他	計
地床炉	—	43	—	31	—	4	13	1	—	18	110
石囲い炉	—	—	—	—	—	1	13	1	1	7	23
土器埋設石囲い炉	—	—	—	—	—	1	3	—	1	—	5
複式炉	—	—	—	—	—	3	28	—	—	—	56
土器埋設炉	—	—	—	1	—	1	10	—	—	1	13
伴なわない	—	17	—	16	—	—	4	1	—	22	60
不明	—	14	—	14	—	—	6	—	22	43	89
（重複）	—	—	—	—	—	−1	−10	−1	—	−2	−25
合計	—	74	—	62	—	9	92	2	25	79	352

表５　長者屋敷遺跡の「大形住居」を除いた住居址の平面形

平面形＼時期区分	早期	前前期葉	前中期葉	前後期葉	中前期葉	中中期葉	中後期葉	後期	晩期	不明他	計
長方形+方形	—	21	—	2	—	—	3	—	—	9	35
隅丸長方形	—	13	—	3	—	2	1	—	2	3	24
長円	—	14	—	—	—	—	—	—	—	1	15
楕円	—	10	—	22	—	3	43	—	—	15	93
円	—	—	—	16	—	2	23	2	—	7	50
不明	—	16	—	19	—	2	22	—	22	53	105
合計	—	74	—	64	—	9	94	2	24	59	352

方形に含めることにし，四辺が直線であるものをいう。隅丸長方形は，長方形のうち頂点が弓形になっているもの，長円は，短辺が直線を含まず，円弧をなしているものをいうことにする。卵形は楕円の中に含めることにし，曲率が長軸方向と短軸方向で違うものをいい，円は曲率が一定であるものをいう。

楕円と長円は，柱穴や周溝により，長辺が直線であるかどうかで分類することにした。

時期的な区分は，本来五期区分や土器型式で律しきれるものではないであろうが，比較検討を行う上での便宜的な方法として，五期区分を，前葉・中葉・後葉に細分して扱うことにする。ただし，早期，後期，晩期はそれぞれ一括して扱うことにする。

こうした分類基準のもとに，まず長者屋敷遺跡における大形住居の平面形と炉の種類をそれぞれ時期別に表にまとめてみた（表―２，３）。次に，上で大形住居とした例を除いたものについて同様の表を作った（表―４，５）。もちろん，この中には大形住居とされるべきものも含まれている

表6　大形住居の炉の形態

炉＼時期区分	早期	前前期葉	前中期葉	前後期葉	中前期葉	中中期葉	中後期葉	後期	晩期	不明他	計
地床炉	—	4	1	8	5	7	3	—	—	—	28
石囲い炉	—	—	—	—	3	5	—	—	1	1	10
土器埋設石囲い炉	—	—	—	—	1	—	—	—	1	—	2
複式炉	—	—	—	—	—	—	4	—	—	—	4
土器埋設炉	—	—	—	—	—	4	1	—	—	—	5
伴なわない	—	2	—	—	1	—	—	—	—	5	8
不明	—	—	—	3	1	—	—	—	—	—	4
（複式）	—	—	—	—	−1	−6	−3	—	—	—	−10
合計	—	6	1	11	10	10	5	0	2	6	51

表7　大形住居の平面形

平面形＼時期区分	早期	前前期葉	前中期葉	前後期葉	中前期葉	中中期葉	中後期葉	後期	晩期	不明他	計
長方形+方形	—	1	1	3	2	5	1	—	—	1	14
隅丸長方形	—	4	—	1	2	—	—	—	—	2	9
長円	—	1	—	5	6	1	—	—	—	1	14
楕円	—	—	—	2	—	4	1	—	—	1	8
円	—	—	—	—	—	—	3	—	2	1	6
不明	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	0
合計	—	6	1	11	10	10	5	—	2	6	51

可能性があるわけであるが，一応通常の住居のおおよその傾向を示すものであろう。

この結果を比較すると，大形住居とした例が通常の住居と，その平面形，炉の形態において異ったあり方を示していると言える。このことから，先にあげた規準が，少なくとも確実に大形住居といえるものを分離しえたと考え，これをもとに大形住居の例を他にも求め（表―1），同じく平面形，炉の形態の表を作った（表―6，7）。

なお，柱穴列からなる大形住居（前述の中村の分類によれば「長方形柱穴列」）は，長者屋敷遺跡には見られないため，ひとまずこれを除外した。

これらの結果を検討すると，長者屋敷遺跡においては早期，前期中葉，中期前葉には住居址例がなく，比較ができないのであるが，大形住居と一般の住居のあり方との間には明らかに差異が認められる。まず，平面形についてみると，長者屋敷における通常の住居においては，前期後葉には楕円及び円の例が増加し，その傾向は晩期まで続く。これに対して大形住居では，楕円は中期中葉及

び中期後葉に増加し，円は中期後葉以降に現われてくる。時期の不明他に分類された円形の一例も，後期～晩期のものである。長方形，隅丸長方形，長円のような平面形は，長者屋敷遺跡では前期前葉には主流であるが，それ以後は比重が低くなっている。これに対して大形住居では早期から中期前葉まで主流となり，中期中葉でも過半数を占めている。

また，時期の不明他に分類された長方形，隅丸長方形，長円の例も全て中期前葉以前には含まれるものである。

このことから大形住居の一般の住居との相違を類推すると，①円形の例は中期後葉以降に見られる，②長方形，隅丸長方形，長円のような細長い平面形をもつものは，中期中葉までが主流である，といえよう。

炉址についていえば，それは炉を伴なわない例と，地床炉や土器埋設炉をもつ住居の例に大きく反映している。長者屋敷遺跡で見る限り，炉を伴なわない住居は中期後葉に多少減少するが，全体的には一定の割合で存在する。しかし大形住居においては，それは早期及び前期前葉，後期には見られるが，あとはわずかであり，時期の不明他と分類してある例も前期から中期初頭と報告された大平遺跡(1)の例である。

地床炉をもつ住居は全般的に見られるが，長者屋敷遺跡においては中期中葉以降，次第に割合が低下し，複式炉の割合が増加しているのに対し，大形住居においては中期後葉にまでその変化がおくれている。また，土器埋設炉は大形住居においては中期中葉が最盛であるが，長者屋敷遺跡では中期後葉に最盛となっている。このことから炉に関する大形住居の一般の住居との相違を類推すると，①早，前期を除いて炉を伴う住居が殆どである，②地床炉の比重が高い時期が多少長く続く，③土器埋設炉の盛期が異なる，という三点があげられよう。

こうした大形住居のあり方は，先に引用した中村，高橋両氏の分類，分析と概ね一致するものである。

さて，大形住居の特異なあり方や，その時期的な差異はどのように考えるべきであろうか。これには２つの考え方がある。その一つは時間的な変化と考えるものであり，もう一つは複数の異なった機能をもつものという考え方である。そして前者は高橋によって代表され，後者は中村によって代表される考え方である。

高橋は大形住居についての形態の相違を「変化」としてとらえ，「大型でない普通型住居跡のそれと比較してみると，早期～前期前半まではほとんど差のない同じような形態変化をしているらしい。この時期の平面形は方形や比率の小さい長方形が基調であるといわれていることから，この時期の住居跡は規模が違うだけで，その他の施設には差がない可能性を示すものであろう。前期後半～中期中葉までの住居跡は，大型住居跡と普通型住居跡との間に大きな差がある。前期中葉の平面形は定かでないが，前期末葉～中期中葉の普通型の円形を半割しそのまま左右に離した形が大形住居跡の長楕円形ということになろう。」（高橋与　1983）としている。これに対し中村は，「普通の」大きさの住居との比較は試みていないが，先にのべたように，掘立柱による大形住居以外のものを，

長方形大形住居址と円形住居址とに分け，その機能を異なったものとしている。中村は，この両者が別のものであるとする根拠として，建物の構造，炉址をあげ，更に時期的に中期末葉を境としていることをあげている（中村　1982)。しかし，建物の構造や炉址は，同一の機能をもった遺構であっても，技術的な変化等に伴ってその様相を変えうるものであり，これをもって両者を異なったものとすることはできないであろう。一般の住居は形態や炉が異なっていても，同一の機能をもった遺構として扱われているのである。また，「長方形大形住居址」が中期末葉まで見られ，それ以降「円形大形住居址」が現われるとしたら，むしろこれは形態の変化ととらえた方が自然ではなかろうか。ある機能をもった施設が中期末葉に急に消滅し，同じ時期に偶然別の機能をもった施設が現われるとするのは多少無理があると思われる。中村のこうした考え方は，大形住居の機能が積雪地帯の共同作業施設及び貯蔵施設であるとする，渡辺による「定説」を前提にしたものではなかろうか。つまり，この説に符合すると考えられるものを長方形大形住居址とし，符合しないものに祭祀施設ないし集会所という別の機能を考えて，円形大形住居址としているのではなかろうか。

こうした点を考慮して，大形住居と通常の住居との平面形，炉の形態の上に表われる差異をまとめると以下のようになる。

大型住居は，前期前葉までには出現している。このときには一般の住居と同じく炉を伴わず，平面形も一般の住居と同様の隅丸長方形を基調としたものであった。この状態は前期中葉ごろまで続く。前期後葉には一般の住居では円形や楕円形のものが現われ，それ以降これが優勢になるが，大型住居は中期中葉まで長方形や隅丸長方形，長円のように細長いものが主流であるが，中期後葉になると細長い形が姿を消し，大型住居も一般の住居のような円形をとるようになり，晩期まで続く。炉は大型住居においても一般の住居と同様，前期前葉から屋内にもちこまれはじめる。前期中葉以降も一般住居においては炉を伴なわない場合が後期に至るまであるのに対し，大形住居では殆どが炉を伴っている。炉の形態は大形住居では中期中葉まで複数の地床炉をもつ例が主体であり，その多くは長軸線上に並ぶ。中期前葉から中期後葉までは石囲い炉や土器埋設炉が現われ，中期後葉には複式炉が見られる。これに対して一般の住居では中期中葉から複式炉が現われはじめ，中期後葉に最盛となる。

このように，大形住居は平面形や炉の形態において，一般の住居と同じような変化をするが，その変化は同時におこるのではなくて，多少遅れをみせる。即ち，円形のプランの採用や複式炉の採用である。そしてその過渡期に一時的に中間的ともいえる形をとる。即ち楕円形のプランの採用や石囲い炉，土器埋設炉である。一般の住居は逆にこの中間的な形を，大形住居より後に一時的に採用する。こうした現象は何を意味するものであろうか。

これは，大形住居の機能と関係する問題として，次節で述べていくことにする。

第四節　大形住居の機能について

大形住居の機能に対して現在，渡辺誠による「積雪地帯の共同作業施設及び貯蔵施設」という説

が一つの定説となっているが，この他にもいくつかの説が提出されている。

本稿におけるこれまでの分析の結果をもとに大型住居の機能を考えていく前に，まずこれらの諸説について概観しておこう。

第一に，大型住居の機能が居住にあるとする説がある。相原康二らの紹介するところによれば，新野直吉は『古代史上の秋田』という本において杉沢台遺跡(5)の大型住居についてふれ，炉の状態からみて「数十人の人々の生活にたえる規模をもっている。…（中略）…それは通常集落の集会場などに擬せられてきた。しかし，この巨大住居跡は時々集会などに使われたものではなく，常時居住の用に供せられたものと認められている。」として，通常に使用された住居であることを唱えているという（相原ほか 1982)。また，丹羽祐一は「縄文時代の集落構造」と題する論考において不動堂遺跡(30)例及び水上谷遺跡(32)例についての分析を行い，これらの住居址において，複数の炉が住居中央短軸に対してシンメトリックに配置すること，そしてそれらが円形及び方形の石囲い炉の組をなすことなどから，他遺跡においては隣接する２軒の住居によって抽象化されるとした居住集団が，両遺跡においては一つの大型住居に同居していたものと考え，いわば communal house 的な把握を試みている（丹羽 1982)。しかし大型住居に見られる一般的な特徴の一つである，遺物の僅少であること，そして上の両者が根拠としてあげた事例における特徴が，大型住居に一般に見られるものではないことから，こうした考え方には妥当性が欠けるように思われる。

第二の説として集会所説がある。この説を紹介している論考（中村 1982，相原ほか 1982）は，その具体的な内容や提唱者についてほとんど触れていないが，恐らく積雪時には集落の広場が使用できなくなるため，その代わりの施設としての機能を考えたものと思われる。これについては，後に改めてのべることにする。

第三の説として祭祀遺構説がある。何らかの特異な様相をもった遺物，遺構は，祭祀や呪術などと結びつけて“解釈”されがちであり，この説もそうした面をもったものであるかもしれないが，中村は「円形大形住居址」に対しては，集会所と並んで祭祀的な解釈も示唆している(中村 1982)。しかし，大型住居一般に関する問題としては，土偶や石棒等の祭祀に関わると思われる遺物の伴わないことから，この解釈も否定的に扱われている(註1)。

第四の説として，すでにのべた共同作業所説がある。これは，『季刊考古学』創刊号の「縄文人は何を食べたか」という特集においてとりあげられているように（工藤 1982，小島 1982)，現在“定説”とされている。中村は，「長方形大形住居址」としたものについてこの考え方を適用しており，その根拠として「①東北地方北部で前期前半に出現して北陸地方への南下がみられる，…（中略）…④炉址のあり方が独特，⑤土器，石器の量が多い，⑥大きな集落では数棟存在する，⑦パン状炭化物・堅果類の出土，⑧フラスコ状ピットが周囲に集まる」（中村 1982）という，大型住居に共通してみられる特徴のうちのいくつかをあげている。また，東北地方北部に全般的に見られる特徴として，「貯蔵穴といわれるフラスコ状ピットが早期にはすでに現われ，しかも，“敲く・擦る”という両面の機能を持った半円状扁平打製石器を普及させている。また，円筒形をした独

特の深鉢形土器を中期中葉まで一貫して作り続けている。」とのべ，これらの文化要素はこの地方にとって植物質の食料の保存，加工が生活を維持するのに不可欠であったことを示しているとしている。そして，一般の住居が石組炉を用いていても，長方形大形住居址の内部には地床炉の伴っている例が圧倒的に多いのも，灰の使用や火熱を必要とする加工に適応したものと考えられるとしている。また，集会所説の根拠ともなっているとしながらも，改築・拡張が多く見られることも構成員の増加による作業量の増加に対応するものであるとしている。更に，安田喜憲の古環境に関する論考をもとに，東北地方北部と南部の間に冷温帯と暖温帯という植生の境界が存在し，そこに高度な植物利用技術が栄え，中期中葉以降に気温が下降するまでそれが続いた可能性をも指摘している（中村　1982)。相原らの紹介するところでは，更に中村は中期中葉以降の低温化が，大規模集団化した集落の維持を困難にさせ，共同作業から個別作業へ転換させたとして，作業小屋としての個々の住居における労働の一施設として複式炉をとらえる見方を示しているという（相原ほか　1982)。この中村による見方は，渡辺の説を継承し，さらに展開したものであるが，これはそのまま受け入れられるものであろうか。まず第一に，共同作業用の大規模な施設を設ける必要性がそれほどであったのであろうかという疑問が生じる。

渡辺は大形住居の機能を「加工工程全体の円滑な推進をはかる上に重要な共同作業施設」と規定して，「アク抜きの主工程である皮むき・製粉・つき砕き，加熱，灰，灰汁の投入等の，大量処理は，対象になる堅果類の落下時期その他からみて，積雪期の冬期に集中される。関連物質の集中管理を考えても，特に積雪量の多い日本海側では屋外作業は不可能であるし，家族単位の労働は非能率的である。」（渡辺　1975）と述べている。

しかし，この大形住居を構築するための労働力の問題を考慮に入れる必要があろう。

渡辺が例にひいた不動堂遺跡(30)においては，大型住居の復原が試みられているが，この作業に関する概報（朝日町教育委員会　1979）によれば，その屋根を葺く萱の量だけでも約6,800束（直径14cm大）に達したという。同時におこなわれた一般の住居におけるそれは約1,300束であったという事からみても大変な量であり，更に現在に比べて貧弱な道具しかもたなかったであろう当時の人々にとっては，それを刈るための労働力だけでも大きな負担であったろう。その上，広い面積の竪穴を掘り込むという作業も必要であって，屋根裏での貯蔵という機能をも併せもっていたとしても，作業の効率をあげ労働力の節約をはかるための施設の建設に対する労働量としては，投入する労働力の方が大きすぎるのではなかろうか。

更に，長者屋敷遺跡の例をはじめとする大形住居が，床面上に直接伴う遺物を殆んどもたないという点も，この作業所説に対して挙げられる疑問である。もし堅果類等の加工，処理作業の行なわれた作業場であったとしたら，それに使用されたとされる大形の筒形の土器や半円状扁平打製石器，あるいは磨石や石皿等が多量に伴うはずではなかろうか。焼失住居であると報告されているいくつかの大形住居においても同様である。

また，沖ノ原遺跡(29)，馬場平Ⅱ遺跡(24)において大形住居から検出されたクッキー状炭化物に

ついても，それが大形住居の共同作業施設や貯蔵施設であることの根拠となるとは思われない。なぜなら，アク抜き，水さらし等の加工を施された堅果類にとって，クッキー状にされた植物質の澱粉は食べるために調整された形であって，貯蔵のために処理されたままの形ではない。いいかえるならば，堅果類は皮がむかれ，擦ったり砕かれたりしたうえで加熱，水さらしなどの方法でアクが抜かれ，粉の形で貯蔵されたと考えられる(註2)。

貯蔵穴としてのフラスコ状土坑が長期貯蔵に適さないことは，大型住居の貯蔵施設としての根拠の一つではあるが，必らずしも妥当であると考えにくい。これははたして堅果類などの植物資源は，冬期の食料以上の意味をもっていたであろうかということであり，長期の保存が必要であったかということである。即ち，春から秋にかけては保存食料に頼る必要はなく，従ってフラスコ状土坑は越冬用の貯蔵穴と考えるべきであろう。積雪時にフラスコ状土坑が不便であることは確かであるが，毎日そこからとり出すのではなく，一定の期間ごとにとり出すとすれば，厚い雪の下にあっても使用できないことはなかろう。

以上のように，渡辺の堅果類をはじめとする植物資源利用のシステムに関する様々な研究の重要性は尊重するべきであるが，大型住居をその中に位置づける考え方には必ずしも妥当性があるとはいいがたく，大形住居の機能に関しては，異なった解釈を考えるべきであろう。

大型住居の最大の特徴である「大きさ」という点と，多くの炉の存在という点から，この機能について考えるなら，やはりそれは，ある程度多くの人数を一ケ所に収容することを目的としたものであったと考えるべきであろう。そして，遺物を殆んど伴なわないことや，通常の住居の大きさやその存在から，大形住居を起居の場として，communal house として考えるのではなく，居住以外の何らかの活動の場として考えるべきであろう。

その活動は，どのようなものであろうか。それを共同作業に求めるのは妥当でないことはすでにのべた通りであるが，同様に，何らかの経済的，実用的な目的を考えるには，あまりにもその必要とされる労働力が大きすぎる。従ってその機能は何らかの精神生活にかかわる活動に求めるべきであろう。占地をはじめとする空間的な問題については，別稿にて扱う予定であり，ここでは触れずにおくとして，すでに見てきたように，大形住居の平面形や炉の形態の変化の様相は，通常の住居のそれとは異なっており，特に円形の平面形や複式炉の採用は，一般の住居においてはそれぞれ前期後葉及び中期中葉であるのに対し，大形住居においてはともに中期後葉である。これは，大形住居が住居の形態の一般的な変化をすぐには受け入れていないことを示すものであり，精神生活に関わる活動の場であることを暗示しているのではなかろうか。

それでは具体的には，どのような活動の場があったと考えられるであろうか。すでにのべたように，祭祀施設としての解釈は，土偶や石棒など，祭祀に関わると思われる遺物の伴なう例の殆んどないことから，否定的に扱われてはいるが，炉の重要性を考えるなら，「場」そのものや「火」，あるいはそこで行なわれる行為そのものに祭祀的意味を求めることも不可能ではなかろう。

こうしたことから，大形住居の機能を，何らかの祭祀的，儀礼的な集会の「場」として考えるこ

とができよう。

これは，大形住居の機能を集会所とする考え方に近いが，その集会のもつ意義は儀礼的なものであり，そういう意味では祭祀施設とする考え方にも近い。

より具体的に考えるならば，まさに食べる形に調理された形態であるクッキー状炭化物の出土例などから，その儀礼的な行為が食事に関するものであったことがうかがえる。即ち，共食の「場」としての大形住居の機能が想定できると考えられる。

この「共食」という概念は，民俗学において，食行為に関する様々な習慣の解釈に用いられてきたものであるが，（柳田　1940，川端　1962）食事を共にすること自体が，共にした者（神と人，人と人）との間に何らかの結びつきをもたらすという観念である。大形住居にこの機能を考えた場合，この共食の「場」は，集落という共同体の統合の象徴であり，また食料資源の再分配の場であったとも考えられる。即ち，冬期の貯蔵食料である堅果類を一定期間ごとに共同の貯蔵所であるフラスコ状土坑群からとり出し，分配する過程で儀礼的な食事をともにし，そうすることによって共同体の統合を強め，個々の house hold 間の互酬的関係を維持し，限られた食料資源の有効かつ平等な分配を行なったのではなかろうか。従って，この大形住居によって抽象化される集団は，集落の構成員のうちの個々の家族，house hold を代表するものによって成っていたといえよう。

こうしたことをもとにもう一度大形住居の形態について考えてみると，縄文早期前葉以降東北地方北部を中心に植物利用のシステムが発達し，冬期における食料の保存技術も発達して人口が増大し集落が大形化する。それに伴って食料資源の分配の場としての共食の場が設けられるようになるが，はじめはそれは一般の住居をそのまま大形化したような形態をとる。その後集落の発展に伴い，大形住居も巨大化し，長方形，隅丸長方形，長円というような細長い形態をとるようになる。これは技術上の問題としての要因もあったと考えられる。即ち，縦横をともに拡大していくと，中央部が高くなくては勾配を保つことができなくなるし，柱から柱までの間隔が広がることになり，長い材が多く必要とされる。しかし，細長いプランをとると棟を延長するだけでよいわけであり，何軒分かの一般の住居を横に連続させたのと同じように作ることができるので，比較的容易である。このようにして選択された細長いプランはまた，構成員の増減に応じて規模を拡大，縮小する上でも，その長軸方向への延長，縮小という形で行なえば，竪穴そのものの掘り込み作業に関しては容易であろう。従って，その後の一般の住居の円形プランへの移行後も，精神生活に関わる文化要素のかわりにくさと同時に，こうした実際的な側面もあって，細長いプランは存続した。中期中葉以後の低温化に伴い集落が小型化し，大形住居も小型化して円形のプランへと移行した。

以上，大形住居の機能について「共食の場」としての解釈を試みてきた。これは集会所もしくは祭祀施設としてのこれまでの解釈が，その具体的内容について殆んど触れていないという点に対応するものであり，また人間の多様な行動の中でも不可欠な「食」行為にに対する考古学上の検討が，専らその実際的な側面にのみ集中していることに対する新たな問題提起でもある。

小　括

ここまで，縄文時代の大形住居についてこの定義と機能についての考察を進めてきた。本稿では，これまで定義が明確にされないまま，大形住居である可能性のあるものを集成するという形でなされていた諸論考に対して，まず確実に大形住居と呼べるものを抽出するという方向で大形住居を捉えるところからはじめた。そして，その時間的な差異を変化として考え，平面形と炉の形態との二点において，通常の住居の変化と比較してみた。そして，その結果を中心に，大形住居の機能について予察を試みた。こうした検討を進める上で，空間的な要素については論じていない。この点については，別稿において本稿の諸論点を補足する形で議論を進めていく予定であるが，ここで若干の見通しを述べておきたい。

一つの文化事象は，一般には時間的，空間的な広がりをもつ。これに対して，考古学的に把握される文化事象は，空間的に散らばる複数の遺物，遺構の集合としてのみ捉えられ，そこから抽象化されていくものである。時間的先後関係ですら多くの場合，層位をはじめとする空間的位置関係の中に解消されてしまう。従って，一つの文化事象を検討する際，空間的分析は最も重要な過程の一つといえよう。こうした視点から大形住居を見た場合，本稿が扱ったような，定義や機能に関する議論に対しても，空間的な側面からの分析が不可欠である。日本列島全体における大形住居の分布といった巨視的なレベルから，一集落内での大形住居の占地や，他の住居，遺構の位置関係，大形住居址内での遺物の出土位置といった微視的なレベルに至るまでの，様々なレベルでの検討が可能である。特に，第一のレベルにおいては，積雪地帯との関係が，大形住居の機能に対する議論の一つの根拠ともなっており，その意味するところは大きい。また，土器型式の分布する領域としてのいわゆる「土器文化圏」との対応関係など，その担い手としての人間集団に関する問題も存在する。更に，大形住居をもつ集落ともたない集落の位置関係，集落内でのフラスコ状土坑や通常の住居に対する位置関係などは，その機能に関する議論をより深化させるものとなろう。

以上，甚だ不充分ながら，大形住居の定義を機能をめぐる考察を行ってきた。空間と人間集団の一つの接点としての大形住居に関する議論への出発点としたい。

末筆ながら，この小文を草するにあたり，東京大学考古学研究室の上野佳也教授，藤本強教授の両先生，国学院大学の乙益重隆教授から御指導賜った。また東京大学考古学研究室の安斎正人，今村啓爾，大塚達朗，佐々木彰，中村慎一の各氏をはじめ多くの方々に御助言，御助力を賜った。記して感謝の意を表したい。

註

1）工藤　1982　p.52

2）このことについては，渡辺自身も『縄文時代の植物食』において民俗例を紹介している。

参 考 文 献

○発掘調査報告書

(1) 大平遺跡

『大平遺跡　発掘調査報告書』（東北縦貫自動車道建設予定地内埋蔵文化財発掘調査）〔青森県埋蔵文化財調査報告書第52集〕1979，青森県教育委員会　工藤康博ほか

(2) 大森勝山遺跡

『岩木山』1968，岩木山刊行会　所収・村越潔ほか

(3) 近野遺跡

『近野遺跡　発掘調査報告書(Ⅳ)』（青森県総合運動公園建設関係発掘調査）〔青森県文化財調査報告書第47集〕1979，青森県教育委員会　三浦圭介ほか

(5) 杉沢台遺跡

『杉沢台遺跡，竹生遺跡　発掘調査報告書』〔秋田県文化財調査報告書第83集〕1981；秋田県教育委員会　永瀬福男ほか

(6) 柳沢遺跡

「秋田県柳沢遺跡発見の住居址」『考古学ジャーナル』No. 99　1974，所収　富樫泰時　――報告書未刊

(7) 荒谷Ａ遺跡

『荒谷Ａ遺跡発掘調査報告書』（二戸バイパス関連遺跡発掘調査）〔岩手県埋文センター文化財調査報告書第57集〕1983，岩手県埋蔵文化財センター

(8) 荒屋Ⅱ遺跡

『東北縦貫自動車道関連遺跡発掘調査報告書』（荒屋Ⅰ・荒屋Ⅱ・越戸Ⅱ）〔岩手県埋文センター文化財調査報告書第21集〕1981，岩手県埋蔵文化財センター　四井謙吉

(9) 大館町遺跡

『大館遺跡群』―昭和55年度発掘調査概報―1981，盛岡市教育委員会　八木光則

(12) 上里遺跡

『上里遺跡発掘調査報告書』（二戸バイパス関連遺跡発掘調査）〔岩手県埋文センター文化財調査報告書第55集〕1983，岩手県埋蔵文化財センター　高橋与右エ門

(13) 観音堂遺跡

『観音堂遺跡第２次発掘調査概報』〔岩手県大迫町埋蔵文化財報告書第６集〕1981，大迫町教育委員会

(14) 塩ケ森遺跡（塩ケ森Ⅰ・Ⅱ遺跡）

『御所ダム建設関連遺跡発掘調査報告書』（雫石町塩ケ森Ⅰ・塩ケ森Ⅱ）〔岩手県埋文センター文化財調査報告書第31集〕1982，岩手県埋蔵文化財センター

(15) 大地渡遺跡

『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅶ』1981，岩手県教育委員会　相原康二

(16) 長者屋敷遺跡

『松尾村長者屋敷遺跡(Ⅰ)』『同(Ⅱ(』〔岩手県埋文センター文化財調査報告書第12集，第20集〕1980，1981，岩手県埋蔵文化財センター　高橋文夫

(17) 繋Ⅲ遺跡

『御所ダム建設関連遺跡発掘調査報告書』（つなぎⅢ，つなぎⅥ他）〔岩手県埋文センター文化財調査報告書第13集〕岩手県埋蔵文化財センター　1980　高橋正之

(18) 繋Ⅴ遺跡

『御所ダム建設関連遺跡発掘調査報告書』（つなぎⅤ，新城館他）〔岩手県埋文センター文化財調査報

告書第30集〕岩手県埋蔵文化財センター　1982　上野猛，中川重紀，高橋正之

(19)　長瀬B遺跡

『二戸バイパス関連遺跡発掘調査報告書』〔岩手県埋文センター文化財調査報告書第30集〕1982，岩手県教育委員会　四井謙吉

(20)　中曽根Ⅱ遺跡

『中曽根Ⅱ遺跡発掘調査報告書』1981，二戸市教育委員会　関豊ほか

(21)　野駄遺跡

『東北縦貫自動車道関連遺跡発掘調査報告書』（野駄，寄木，崩石）〔岩手県埋文センター文化財調査報告書第11集〕1981，岩手県埋蔵文化財センター　四井謙吉

(22)　八天遺跡

『八天遺跡』（昭和50年～昭和52年度調査）〔北上市文化財調査報告第27集〕1979，北上市教育委員会　本堂寿一，林謙作

(23)　鳩岡崎遺跡

『東北縦貫自動道関係埋蔵文化財調査報告書ⅩⅤ－2』〔岩手県文化財調査報告書第70集〕1982，岩手県教育委員会　相原康二ほか

(24)　馬場平Ⅱ遺跡

『一戸バイパス関係埋蔵文化財報告書Ⅲ』〔一戸町文化財調査報告書第4集〕1983，一戸町教育委員会　高田和徳

(27)　湯沢遺跡

『都南村湯沢遺跡（遺構編）』〔岩手県埋文センター文化財調査報告書第2集〕1978，岩手県埋蔵文化財センター　三浦謙一ほか

(28)　水上遺跡

『水上遺跡発掘調査報告書』〔山形県埋蔵文化財調査報告書第27集〕1980，山形教育委員会

(29)　沖ノ原遺跡

『新潟県中魚沼郡津南町沖ノ原遺跡発掘調査報告書』〔津南町文化財調査報告書 No. 12〕1977，津南町教育委員会　江坂輝弥，渡辺誠

(30)　不動堂遺跡

『富山県朝日町不動堂遺跡第1次発掘調査概報』1974，富山県教育委員会　小島俊彰　――報告書未刊

(31)　松原遺跡

『富山県庄川町松原遺跡緊急発掘調査概報』1975，庄川町教育委員会　池野正男ほか　――報告書未刊

(32)　水上谷遺跡

『富山県小杉町水上谷遺跡緊急発掘調査概報』1974，富山県教育委員会　橋本正，神保孝造　――報告書未刊

(33)　吉峰遺跡

『富山県立山町吉峰遺跡第4次緊急発掘調査概報』1975，富山県教育委員会　――報告書未刊

(34)　莇生遺跡

『莇生遺跡』（石川県能美郡辰口町莇生遺跡発掘調査報告）1978，辰口町教育委員会

○論文，その他

・相原康二ほか　『鳩岡崎遺跡』1982

・赤山容造　「竪穴住居」『縄文文化の研究』8　1982，所収（p. 110～121）

・橋本正　「竪穴住居の分類と系譜」『考古学研究』23－3　1976，（p. 37～72）

・石野博信　「考古学から見た古代日本の住居」『日本古代文化の探究　家　』（大林太良（編））1975，所収（p. 75～192）

・川端豊彦　「食事・食器」『日本民俗学大系』6　1962，所収（p. 273～290）

・工藤泰博　「大形住居址（東北地方）」『季刊考古学』創刊号　1982,　(p. 55～57)
・小島俊彰　「富山県不動堂遺跡発見の大住居址」『考古学ジャーナル』No. 85　1973,　(p. 13～16)
・小島俊彰　「大形住居址（北陸地方）」『季刊考古学』創刊号　1982,　(p. 57～58)
・高田和徳　『馬場平Ⅱ遺跡』1983
・高橋文夫　『長者屋敷遺跡(Ⅰ)』『同(Ⅱ)』1980, 1981
・高橋文夫　「大型住居址における一重複例――富山県朝日町不動堂遺跡の第2号住居址を中心に――」『紀要』Ⅱ（岩手県埋蔵文化財センター）1982,　(p. 47～54)
・高橋与右ヱ門　『上里遺跡』1983
・富樫泰時　「秋田県柳沢遺跡発見の住居址」『考古学ジャーナル』No. 99　1974,　(p. 13～14)
・中村良幸　「大形住居」『縄文文化の研究』8　1982,　(p. 134～146)
・丹羽佑一　「縄文時代中期における集落の空間構成と集団の諸関係」『史林』61―2　1978,　(p. 100～138)
・丹羽佑一　「縄文時代の集団構造―中期集落における住居址群の分析より―」『考古学論考　小林行雄博士古稀記念論文集』1982, 所収（p. 41～74)
・渡辺誠　『縄文時代の植物食』1975
・渡辺誠ほか　『沖ノ原遺跡』1977
・渡辺誠　「雪国の縄文家屋」『小田原考古学報』9　1980,　(p. 37～43)
・柳田国男　『食物と心臓』（『定本柳田国男集』14　1940, 所収（p. 219～239))

＜追　記＞

本稿脱稿後，岩手県埋蔵文化財センター発行の『紀要』Ⅴ　所収の「縄文時代前・中期住居址群の変遷」（三浦謙一・佐々木勝）を読む機会を得た。

この論考は，本稿で扱った長者屋敷遺跡における縄文前～中期を中心とする住居址の諸様相を詳細に分析したものであり得るところの大きいものであった。

次稿において論ずる予定の，大形住居の時間的空間的分布に関する議論でその成果を活用させていただくことにしたい。

縄文時代の「大形住居」について（その1）

Ogata-jukyo (Large-scale Houses) of the Jōmon Period (I)

——Their Definition and Function——

One type of houses, in Japanese generally named *Ogata-jukyo* (large-scale house), is found in the Jōmon Period of Japan. Their most significant characteristic is dimension, but that makes it difficult to discern their essential qualities, because the standard for distinction between *Ogata-jukyo* and standard dwellings rests on dimensions that change continuously. It is, therefore, impossible to define the standard by given objective measurements. If large-scale houses and standard dwellings are distinguished by scale only, the problem whether they should be considered an independent constituent of Jômon culture is obscured. If they are distinguished by dimension only, should they be understood as one single cultural element. There may be two typological forms of *Ogata-jukyo*, one a cluster of dwelling pits, the other an arrangement of post holes. Although both may be liable to more detailed classification, I confine myself to the former in this paper.

There are numerous other problems such as lack of terminological unity. As a matter of definition, the issue of function must be clarified. (The appellation *jukyo* (dwelling) is not strictly applicable in many cases.) They have been considered to be 1) communal houses, 2) structures for cooperative work processes and storage, 3) meeting places, and 4) ritual structures. The second interpretation is most favoured. It was suggested by M. Watanabe and according to his explanation, they were structures for communal work, like processing of nuts and for storage in the snow country. However, the amount of labour needed to construct them compares badly with labour saved by cooperation.

To clarify some of these issues, it is necessary to define the object. To this end I investigated the outlines of dwellings and the forms of fireplaces of the *Choja-yashiki* site in *Iwate* prefecture. As a result, at least eleven of 352 dwelling pits of this site were considered to possess properties to define them as an independent element They are distinguished by their scale, more than 10 m length and more than 8 m width. I preliminarily considered this to be the norm, investigated *Ogata-jukyo* of other sites, and compared deviations in the outline of large-scale dwellings and the form of their fireplaces with standard dwellings.

As regards outlines, standard dwellings are mostly rectangular from the earliest to the middle phase of the early Jômon period and later, circular and oval outlines increase gradually. On the other hand, *Ogata-jukyo* outlines are mostly rectangular or elongated from

the earlier early to the middle phase of the middle Jômon period, later, circular outlines increase. As regards forms of fireplaces, many standard dwellings have no fireplaces till the later Jômon period, although most of *Ogata-jukyo* are provided with fireplaces from the outset. Moreover, some standard dwellings have fireplaces on the earthen floor up until the earlier middle Jômon period and *Fukushiki-ro* (fireplaces consisting of an arrangement of stones composed of two parts) from the middle phase of the middle Jômon period. On the other hand, *Ogata-jukyo* have a number of fireplaces on the earthen floor, arranged lineally till the middle phase of the middle Jômon period, and from the earlier middle to the later middle Jômon period, they have fireplaces with arrangements of stones or with buried pottery, and from the later middle Jômon period, they have *Fukushiki-ro*.

Comparisons of standard dwellings and *Ogata-jukyo* with regard to outlines and forms of fireplaces, suggested that changes of *Ogata-jukyo* occured later than changes of standard dwellings.

According to these results, the conditions of remains, and the existence of flask-shaped pits, I presented a hypothesis for the function of *Ogata-jukyo*, as place for communal dining. Specifically, a place for ritual feasts attended by members of a social group that were intended to maintain reciprocal interdependence through distribution or re-destribution of stored provisions.

There are numerous problems posed by this hypothesis and I intend to apply myself, to them especially their spatial distribution, in following papers.